

## 論文内容の要旨

報告番号		氏名	中川 信
<b>Vascularized Bone Grafts from the Dorsal Wrist for the Treatment of Kienböck Disease</b>			
(和訳) Kienböck病 に対する手関節背側からの血管柄付骨移植術			

### 論文内容の要旨

**目的** stage2、3のKienböck病に対して手関節背側で3か所の異なる部位からの血管柄付骨移植術後の機能及びレントゲン評価の比較をする。また外科的手技のコツとピットホールを議論した。

**方法** 28例の血管柄付骨移植術のうち橈骨背側の extensor 4+5 compartment artery bone graft が8例、1,2supraretinacular intercompartmental artery graft が12例、2 dorsal metacarpal neck graft が8例であった。平均年齢は32歳。Lichtman分類ではstage2が8例、3Aが10例、3Bが10例であった。術後10週間は手根中央関節の一時的な鋼線固定を施行した。

**結果** 平均観察期間は70か月。痛みは27例で軽減し、VASは術前59から術後は18と改善した。手関節の掌背屈の可動域は87度から117度、握力は21kgから33kgに改善した。Carpal height ratio は0.52から0.53とほぼ変化がなかった。分節化した壊死骨は14例中7例が治癒した。3種類のドナー間での機能及びレントゲンの比較では有意差がなかった。

**結論** 手関節および手の背側からの異なった3種類の血管柄付骨移植術の結果は良好であった。血管束は支帯や筋膜とともに十分な骨膜を含んで挙上することと血管柄付移植骨は縦に皮質骨を挿入することが重要である。